

## フョイエルバッハの会通信 第104号

### 国際フョイエルバッハ学会幹事会議事録

Protokoll des Vorstandstreffens der Internationalen Gesellschaft der Feuerbach-Forscher vom 12.11. 2016 in Münster

2016年11月12日ミュンスターにて開催。出席者：ライテマイアー（会長）、トマソーニ（副会長）、ズィファディング（書記）、プレーガー（会計）〔副会長柴田隆行欠席。議事録確認にて承認〕

**学会の現状**（ライテマイアー）：会の老齢化。多くの重要な（創立期の）会員が死亡。ミュンスターのウエストファリア・ヴィルヘルム大学(WWU)でのウルズラ・ライテマイアーによるフョイエルバッハ研究機関(Arbeitsstelle)の設立。学会運営は WWU を越えて展開し得る。このため学会は制度的に安定し、事実将来は保証されている。上記研究機関はウルズラ・ライテマイアー個人と結びついているわけではないので、彼女が定年退職しても存続しうる。学会は、経費節約のため独自のホームページを持っていないが、WWU のホームページを通して学会ホームページが開かれている。学会と大学との連携が学会規約と合致しうるかについての説明が残っていた。当然ながら学会の自立性はこの研究機関との結合で脅かされることはないが、WWU の研究機関との連携は学会の存続にとって不可欠である。学会自身は経済的手段をほとんど満たしていないし会費もほとんど入っていないからだ。本幹事会は、次の研究大会の半年前に会員総会を招集し学会の将来の問題を討議すべきだと決定した。会員総会のための一定の会員数が規約に規定されているかについて明らかにされなければならない。

**会計報告**（プレーガー）：2013年10月16日付の文書でドイツ銀行カストロップ・ラウクセル支店は学会の当時の口座を閉鎖した。求められていた活動実績（ハンス＝マルティン・ザスは連絡不能。ドイツ銀行が彼の署名を必要とした）を立証できなかったからだ。したがって口座は暫く閉鎖状態にあった。学会の現在の口座はフォルクス銀行ハム／ドルトムント支店にあるが、口座執行料はかかっていない。会計係のフレデリック・プレーガーの下部口座として利用しているからだ。2014年7月24日にドイツ銀行カストロップ・ラウクセル支店の口座は閉鎖となり、会費はプレーガーの口座に移管された。2014年8月13日（記帳日）422,16ユーロ（学会の預金残高）が上記下部口座にあった。ウルズラ・ライテマイアーとフレデリック・プレーガーに全権委任された。口座は現在（2016年7月4日）563,16ユーロある。会費が最後に支払われたのは2016年1月だった。幹事会はフレデリック・プレーガーを仮の会計係として認定した。仮と言うのは、会計係を選出するだけの総会を大会と連動して開くことは組織的理由で不可能だったからだ。

**会員動向**（ズィファディング）：全体的に言って、学会活動に積極的に参加している会員はごく少数である。幹事会は、2017年中に電子メールにて学会員の状態を確認すべきだと決定した。1回目の電子メールで会員に、学会会員であることにさらに関心があるかについて問う。それに加えて学会費の支払いを思い出して貰う。2回目の電子メール（6週間後）で、先の質問に答えなかったか退会を表明した会員は、規約に従い会員資格を終了することが告げられる。

**出版**（ライテマイアー）：

a) シュプリンガー出版よりフョイエルバッハ・ハンドブックについて照会あり：ライテマイアーは、シュプリンガー出版編集長シンドラー氏から照会があったことを幹事会に報告した。照会事項は、ウルズラ・ライテマイアーがフョイエルバッハ・ハンドブック（オンライン／印刷）を編集することに関心があるかということだった。ハンドブックは三月前期の文脈に位置づけられ、歴史・哲学シリーズとして公刊される。内容的には、三月前期の概要、フョイエルバッハの伝記、彼の著作と影響史ならびに

理論的關係可能性が考えられる。文体としてハンドブックではとくに理解しやすさが必要で、一般的な特徴が明示され、文献学的解釈は少ない。頁数はまだ示されていない。編集事務はシュプリンガー出版が引き受けるだろう。もしかすると、フォイエルバッハ研究機関で、出版準備のための学生による助力採用のための経済的支援が考えられる。ウルズラ・ライテマイアーは学会の支援を期待している。学会員に執筆者となるよう適切に依頼する計画である。

b) 2016 年大会号刊行予算：ミュンスターでの学会大会（「将来の哲学と教育学。フォイエルバッハ兄弟ルートヴィヒとフリードリヒの対話」。2016 年 11 月 11 日～13 日）の出版に関する財政についてはまだ明らかになっていない。ライテマイアーは、上記研究機関が財源として申請しうる約 2000 ～ 3000 ユーロを希望している。大会号の公刊は 2018 年を予定している。（柴田隆行訳）

---

## ウルズラ・ライテマイアー「誤認された思想家から現代的思想家へ。ドイツ語圏における 1965 年から 2015 年までのルートヴィヒ・フォイエルバッハ哲学の受容」

Vom verkannten zum modernen Denker. Die Rezeption der Philosophie Ludwig Feuerbachs zwischen 1965 und 2015 im deutschsprachigen Raum.

### 要旨

本稿は、1965 年から 2015 年にかけてのルートヴィヒ・フォイエルバッハ哲学のドイツ語圏における受容を扱うが、その重点を鉄のカーテン崩壊の意味に置く。冷戦時代のフォイエルバッハ研究は、観念論（ヘーゲル主義）と唯物論（マルクス主義）とのイデオロギー的闘争によって刻印されたが、最近の研究はフォイエルバッハの宗教哲学と人間学の独自性を強調し、世俗化後の社会に生きるわれわれに指針を与えうる倫理の定式化にとってのフォイエルバッハ哲学の意義を浮き彫りにしている。最近 50 年間のドイツ語圏におけるフォイエルバッハ受容に関する、ここで素描する簡潔な歴史は、1990 年以前の東西ドイツのイデオロギー的距離と、冷戦終結後の両サイドで行われた学問的分析への復帰を反映している。議論の国際化は、フォイエルバッハの人間学はヘーゲルの認識論の水準にもマルクス主義的社会学にも達しておらず何の歴史的社会的媒介も持たない時代遅れの形而上学以上のものではない、とするエンゲルスの断言から、フォイエルバッハ人間学を解放した。

ルートヴィヒ・フォイエルバッハの哲学を分析する少なからぬ労作が難じているのは、彼の全集に対する注意が欠けているという点である。ヘーゲルとマルクスの関係か、いわゆる「投影理論」の文脈でのみ議論されているからだ、というのである。実際確認しうることだが、フォイエルバッハを、師匠を完全には理解しない不実なヘーゲル学徒とするかそれとも政治的实践にあえて踏み込まなかったマルクス主義的経済批判の先駆者とするかいずれかに解釈する出版物は 1960 年代以降も、フォイエルバッハを自立した思想家として特徴づける解釈よりも数が多い。後者は、フォイエルバッハの哲学的ないし哲学史的な意義は、ヘーゲルとマルクスとの間の蝶番の役割を演じさせるとか、心理分析により純化された投影理論(1)だとかとして通用させるとかでは尽きないとする。これに対して研究という観点から妥当としなければならないことは、認識論的に基礎づけられた標準的人間学ならびにヘーゲル弁証法を具体化する対話の哲学をわれわれはルートヴィヒ・フォイエルバッハに負っていること、さまざまな学問分野で拾い集められた多様な理論的関連可能性を実現することである(2)。こうして見ると、フォイエルバッハ解釈は理念的に 4 つの主要カテゴリーに分けられるだろう。それはしかも、フォイエルバッハの宗教哲学や彼の哲学史的研究ないし彼の綱領的文書が学問的関心の中心をなすか否かとは独立にである。

1. 気の利いたヘーゲル主義者としてのフォイエルバッハ
2. 直観するだけの唯物論の弁護人としてのフォイエルバッハ
3. 投影理論の発見者としてのフォイエルバッハ
4. 現代の身体的人間学の創始者としてのフォイエルバッハ

さてしかし、これではフォイエルバッハに関するほとんどの研究がこの基準ではきちんと区分できないことになる。たとえば、私はここでヴェルナー・シュッフェンハウアーの『フォイエルバッハと若きマルクス』（1965年）を挙げよう。厳しい検閲出版下にあった東ベルリンで公刊されたこの著作は、公的には、また導入として、第2点に挙げた読み方に位置づけられ、フォイエルバッハは史的唯物論のより高度に発展した立場に達し得なかったとされる。しかし、シュッフェンハウアーは、同時に脚註で詳しく、しかも正統マルクス主義的なフォイエルバッハ整理とは矛盾するかたちで、フォイエルバッハがマルクスに大きな影響を与えたこと、そして——マルクスの評価で証明されている——一見拒否されているように見えるフォイエルバッハの哲学的自立性を裏口で再確認している。だがそうだとでもこの研究は比較研究に留まっている。すなわち、フォイエルバッハはもっぱらマルクスへの眼差ししないしエンゲルスによって綱領的に企てられた科学的マルクス主義の眼差しで考察されており、その結果、この観点では全体としてフォイエルバッハの相対的な哲学的自立性が、彼の「非ブルジョア的」後継者との比較で語られうるにすぎない。フォイエルバッハ哲学を前科学的とするエンゲルスによって強要されたこうした解釈(3)は、ドイツ戦後史における「転向」をうまく生きのび、また、ブルジョア経済学批判を基礎とする将来の共産主義社会についてのマルクス理論の中に発展し実現化されたヘーゲルを再認識するヘーゲル主義者によっても援用された。このことはすなわち、フォイエルバッハがヘーゲルを批判し終えていないとする諸々の解釈(4)が、それゆえにフォイエルバッハはマルクスの必然的な推論にも達しえなかったとする点で(5)、エンゲルスと意見を同じくする例の立場と同盟関係にあることを示している。ヘーゲルを正しく理解しない人は、内容もそうだが、この歴史哲学、宗教哲学、法哲学を、共産主義的ないし社会主義的な社会的実践理論として考えることができないという。つまり、リスト1に分類されたヘーゲル正統派は、往々にしてしかも必然的に、リスト2に挙げたマルクス主義正統派と結びつき、その結果、ここでも大きな断片の塊があり〔フォイエルバッハの全体像を見ないで——訳者註〕、それによってヘーゲル派とマルクス主義者は「フォイエルバッハの件」できちんと分けることができない。彼らは、政治的立場が対立する場合でも、互いに参照し合っている。

第3点で挙げた、フォイエルバッハに帰せられる投影理論もここで無関係に笑ってはいられない。ヘーゲル派や史的唯物論の観点からも、フォイエルバッハの「無心論」を研究する宗教哲学的ないし広義の神学的な研究の観点からも、縦横に酷使される。したがって、投影理論という検索語も、一つのフォイエルバッハ解釈と他の諸々の解釈とを区別するきちんとした分類カテゴリーにおさまらない。ここではせいぜい、最近の研究文献で投影理論という概念は、フォイエルバッハの宗教哲学との関係で問題とされるかぎり(6)、現代史的区分がなされるにすぎないが、その一方で、昨日の知識を集める辞典ではこの概念は依然として作用し続けるであろう。

こうして唯一、第4点として挙げた身体人間学だけが、フォイエルバッハ哲学をそれ自体で、他の哲学や現存在を気遣う神学の眼鏡を通さずに考察する試みのより確実な基準として現れる。それにもかかわらず、フォイエルバッハの理論的自立性を問題とするこの読み方も、フォイエルバッハを思弁哲学と唯物論的社会理論の間に哲学史的に区分することを避けて通れず、結局、フォイエルバッハはこんにちから見てむしろ、観念論とその相手である機械的唯物論という伝統的なラインにまだ立つのか、それとも、解放をめざして価値評価されたヘーゲル後継者による史的弁証法的唯物論という伝統的なラインに立つのかを決定しなければならない。フォイエルバッハを、観念論と唯物論の彼岸で、啓蒙の伝統の中に置き(7)、そのことによって彼を、シュタルクによるフォイエルバッハ伝に対する

エンゲルスの書評以来ブロック政治を転向にまで導いたイデオロギー的争いから解放する第3の道は、たしかに非常に特殊化された国際的フォイエルバッハ研究の中で貫徹されたが、しかしなお普遍的哲学的意識への入口をとうてい見出すことができていない。換言すれば、フォイエルバッハに対して、彼の身体人間学と対話哲学を基礎とする理論的自立性を、イデオロギー的塹壕戦の彼方で、啓蒙の中で始められこんにちまで続いている世俗化過程の中で、証明してみせる諸々の作業は、なおまばらに種子を撒くだけだが、それでもなんとか最新のフォイエルバッハ伝の中でフランチェスコ・トマゾーニによって言語化された。これは2015年にドイツ語に訳されたが、この件での研究の立場を最も良くしかも詳細に再現している(8)。

最近50年の、カテゴリー化が困難なフォイエルバッハ受容に関するここに記述した出発状況を前にして、本来残された道はただ一つ、ドイツ語圏における近年ないし最近のフォイエルバッハ受容の歴史を選別し、筆者が重要とみなす個別研究を手がかりとして、描写することであり、それによって最終的にはおそらく、昇り坂にある解釈のラインを明示することができるであろう。フォイエルバッハの哲学的な立場を明らかにするのはこうした解釈であると同時に、間違えようのない彼の哲学的草稿である。これは彼の思考を三月前期の直接的な時代精神から解放し、世界変革の力を顕示し、またこれは、偉大な哲学者(この点でエピゴーネンと区別される)にのみ特徴的なものである。

#### 脚註

- ・本稿のごく短縮された概要がフランチェスコ・トマゾーニによりイタリアで公刊された。La ricezione della filosofia di Ludwig Feuerbach negli studi in lingua tedesca fra il 1965 e il 2015, in: *Rivista di Storia Della Filosofia* 3/2016, 523-534.
- (1)「投影」概念への不注意な関わりを、完全な人間性の徴表として神的敬意を解読するフォイエルバッハという観点から、批判する文献として、次の論文を参照せよ。Thilo Holzmüller, "Projektion - ein fragwürdiger Begriff in der Feuerbach-Rezeption?", in: *Neue Zeitschrift für Systematische Theologie und Religionsphilosophie*, Band 28, Berlin 1986, 77-100.
- (2)これについてたとえば学会大会記録 *Ludwig Feuerbach (1804-1872). Identität und Pluralismus in der globalen Gesellschaft*, hg. v. Ursula Reitemeyer et al., Münster 2006.を参照せよ。
- (3)ここで想定しているのは、1885年にシュタルクによって書かれたフォイエルバッハ伝に対するエンゲルスの書評であり、これは1888年に『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の出発』と題されて公刊された(Karl Marx/Friedrich Engels, *Werke*, hg. v. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1962, Bd. 21, 259-307. (以下 MEW と略記する). これと関連してヴォルフガング・ルフエーヴルによる「フリードリヒ・エンゲルスのフォイエルバッハ像」(Hans-Jürg Braun et al. (Hg.), *Ludwig Feuerbach und die Philosophie der Zukunft*, Berlin 1990, 713-728)を参照せよ。
- (4)たとえば、ヴァルター・イエシュケ「フォイエルバッハと現代の宗教哲学的議論」(Braun (Hg.), *Feuerbach und die Philosophie der Zukunft*, 113-134, 117)ならびにエーリヒ・ティース「哲学と現実。ルートヴィヒ・フォイエルバッハのヘーゲル批判」(ders. (Hg.), *Ludwig Feuerbach*, Darmstadt 1976, 431-482)をも参照せよ。
- (5)たとえば、アンドレアス・アルント「直接性。フォイエルバッハとマルクスにおける概念の経歴。思弁との決別」(Braun et al. (Hg.), *Feuerbach und die Philosophie der Zukunft*, 503-527, 525)ならびにマルティナ・トーム「フォイエルバッハの『将来の哲学の根本命題』の、カール・マルクスの「経済学・哲学草稿」での生産的批判的改作」(Braun et al. (Hg.), *Feuerbach und die Philosophie der Zukunft*, 691-711)を参照せよ。
- (6)ファルコ・シュミーダーはこの件についてややあいまいである。彼は一方で、フォイエルバッハは投影という概念を一度も扱っていないと強調するが、他方で投影概念を断念できず、それが彼のテーゼ、フォイエルバッハの模造理論と写真の始まりとの合致は偶然ではなく現代史的に媒介しているとするテーゼの中心的な鍵概念となっている。Falko Schmieder, *Ludwig Feuerbach und der Eingang der*

*klassischen Fotografie. Zum Verhältnis von anthropologischem und historischem Materialismus*, Berlin / Wien 2004 ならびに同著者による「フォイエルバッハの宗教批判と唯物論的哲学にとっての投影概念の意義」(Ursula Reitemeyer et al. (Hg.), *Ludwig Feuerbach (1804-1872)* (Anm. 3), 267-281)を参照せよ。 .

- (7) この点でとくにウルズラ・ライテマイアー「フォイエルバッハと啓蒙」(Walter Jaeschke / Francesco Tomasoni (Hg.), *Ludwig Feuerbach und die Geschichte der Philosophie*, Berlin 1998, 273-278)、タマラ・ドウロウガッチュ「ルソーとフォイエルバッハにおける自然概念。情感主義から人間学へ」(Jaeschke / Tomasoni (Hg.), *Feuerbach und die Geschichte der Philosophie*, 260-268)、アンドレ・キス「ルートヴィヒ・フォイエルバッハの啓蒙概念を規定する試み」(Hans-Jürg Braun (Hg.), *Ludwig Feuerbach und die Fortsetzung der Aufklärung*, Zürich 2004, 13-23)、フランチェスコ・トマソーニ「フォイエルバッハと啓蒙。批判的再構築への一寄与」(Braun (Hg.), *Feuerbach und die Fortsetzung der Aufklärung*, 25-43)を参照せよ。
- (8) Francesco Tomasoni, *Ludwig Feuerbach. Entstehung, Entwicklung und Bedeutung seines Werks*, Münster 2015, 180.同 411 頁も参照せよ。

#### 訳者註

以上が本稿の序論であり、以下次のような文献が詳細に分析される。ここまでが原文 4 頁半であり、全体では 27 頁の労作である。数回に分けて翻訳紹介する予定である。

1. Werner Schuffenhauer, <i>Feuerbach und der junge Marx</i> (1965)	5
2. Hans-Jürg Braun, <i>Die Religionsphilosophie L. Feuerbachs</i> (1972)	8
3. Erich Thies, <i>Philosophie und Wirklichkeit. Die Hegelkritik Ludwig Feuerbachs</i> (1972)	10
4. Alfred Schmidt, <i>Emanzipatorische Sinnlichkeit</i> (1973)	12
5. Ursula Reitemeyer, <i>Philosophie der Leiblichkeit. Ludwig Feuerbachs Entwurf einer Philosophie der Zukunft</i> (1988)	15
6. Francesco Tomasoni, <i>Ludwig Feuerbach und die nicht-menschliche Natur</i> (1990)	17
Zwischenbilanz	19
7. Der Einfluß der Internationalen Feuerbachgesellschaft Societas Ad Studia De Hominis Condicione Colenda auf die deutschsprachige Feuerbachrezeption	19
8. Biographien	23
Nachbemerkung	26

(柴田隆行訳)

---

## 「食べること」をめぐる冒険 — 「食べること」の哲学風エッセイ —

小林荘介

### 第2回 宗教と食べること——キリスト教の食べること①「主の晩餐」の出典——

食えるということはその食べ物の命を殺め、それを自分の血と肉にし、その命を引き継ぎ、それによって生かされることである。

それはまた、象徴的に何かを意味する儀式として行われることがある。

その1つの例として、今回から何回かに亘って、キリスト教の儀式である聖餐式、聖体拝領がどのようなものかについて考えてみたい。

聖餐式、聖体拝領の起源となっている「主の晩餐」といわれるものは、新約聖書内に収められている福音書のすべてに書かれており、マタイによる福音書(26章26節-30節)、マルコによる福音書(14章22節-26節)、ルカによる福音書(22章14節-23節)、ヨハネによる福音書(13章21節-30節、裏切りの予告)に書かれている。

今回は、その中で、もっとも文章量が多いルカによる福音書のものを紹介する。

時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。」(ルカによる福音書22章14節-23節)

また、福音書外ではあるが、コリント人の第1の手紙(11章23節-26節)においても、イエスが「主の晩餐」を行ったときのようすについての言及がある。

今回はこの箇所の紹介と、「主の晩餐」がキリスト教においてどのような意味を持つ儀式なのかについて述べてみたい。

(つづく)

---

事務局から

\*本紙は季刊発行です(次号12月)。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

\*年会費500円。郵便振替00160-1-84468「フォイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>